

虚の符

11

イカダ

http://www.kozui.net

ねがい 坂多瑩子

夢のおこぼれで建った家は
いつも海にむかって窓がひらいている

玄関なんてないけど
暖炉があつて
日がな一日

暖炉の前にすわっていたと思うが
なかなかそうはいかない

五分刈りの大工の棟梁がやってきて
きょうあたり海側に増築しようやという

海は窓の真下まできている
お天気の良い日なんて
さらさらさらさら
こんな幸せはないというのに

増築増築と

こわれたレコード針みたいに
つつかれるもんだから
ブラウスの袖から

血がひとすじふたすじ
ほら見て見ていつても

棟梁は手と足をもっている
と信じているのだろう

やつとてたあたしの家

いつまでも
いつまでも

目がさめませんように



旅

神泉 薫

破れた羽に 一枚の切手を貼って
飛び立つてゆく蝶の物語を読んだ

地球儀を回しながら
私の胸の空洞を埋める
異国行きの切手を探す

ブルキナファソ
モロッコ
イスタンブール
マリ

くるくると視界をめぐる片仮名の響きは
出発の秘密をはらんで心を誘う

親切な封筒が
余った切手を蝶に与えた
旅に必要な水を分けるように

ひらひらと羽と化した切手は
目的地の風に変更

気ままに咲き乱れる花々の下へ
思いもしない色彩の手のひらへとたどり着いてゆく

身支度は軽い方がいい
二枚の羽

二本の足があれば
傷めばどこからか見えぬ手が降り
新たな道が拓く

触角とアンテナだけは磨いておけ
水の散る方位へと
一心に進んでいけ

思えば切手は 切符に似ている
地名を刻んだ一枚の紙は

太古から現在
現在から太古へと行き交う人々の
魂のつばさ

ときにきれぎれになって宙を舞いながら
大空を見つめる

くりかえしくりかえし
振り向く間もなく
地球の臍から投函される
ひとつひとつの生
出発と終焉
それぞれの
ただ一つの旅は
きらめく朝露のしずくに似て
甘い蜜の
匂いがする



ひ.と。海埜今日子

じんがいの、ひとでないものの、あいまいさが、はずれたがとして、ここに、なかに、あった。きつかけは、おそらく、こたえのような、いしで。往來をこえ、みあげた、かしよが、いつか、ひ色にそまるだろう。ひとを、いとこのよう、つむぐには、いいきせつ。

辻と坂。いまちがえのような、かんけいとして、ざりざり、ほのおみたい、ひ色を、そだてたかった。しほうにむすぶ、はなれてゆく、そのあわいで、と、ふみしめたなら、たどることが、はぐくみますか。ここへ、さげびをそこへ。あながい新芽がめだつてきた。

ひ、なる、ほこへ。かれらが、どんどん、ぬくもつて、つめたくなるので、ひとたび、みたび、おいつこう。こうさは、きつと、ふれたいから。そまつた、けしきが、いつも、きせつを、こえにする。わたしはいないよ、なんとけさやかな、ひとへ、なびく。

そのひ、という、いつか。辻をおもうには、なぜか、木が、いたいのだ。ねをほつて、じゅえきを、たくして、坂をおもうには、いつも、かれを、やすらぐから、かもしれない。ひとたちの、ものたちの、どんな、ぬくもりが、芽ぶきますか。だつたらしい。

ひとの、そとで、なかで。こえを、きつと、ふりむくから。はずれたものたちが、ほほをそめる。そんな、こういを、かれに、みおくり、かえります、めぐりますか。またねえ、あつまることか、はなれるので、この坂、のぼるよ。ひ、いろ、かたむく、いとしい、きせつだ。

羊飼いの二条千河

羊なら 誰もか飼っている
自分の影にすら怯え
隙なく身を寄せ合つて
群れ集う羊たちを

羊には、そう、
羊飼いが必要だ
見境なく草原を喰い尽くし
飢えた狼に付け狙われる彼らを
守り養う者が

その代償に 時には肉を
細い毛や乳や
ほしままにできるとしても
迷い続けるものを導き続けるというのは
やはり骨の折れる仕事に違いない
いつそ山羊角への生置にでも捧げてしまえば
肩の荷も下りるのだろうが
柵に囲われて安々とまどろむ彼らを
一頭一頭数え上げもせず
この果てない夜

どうして眠りにつくことなどできるだろう
かつて大鷲の姿をした運命にさらわれて
星空に昇つた美少年のように
飼うべき羊たちを地上に忘れ去り
神々に飼われるつもりならば、ともかくも
つまり、そう、
羊は必要なのだ
未踏の原野に立ちすくみ
啼いているばかりの彼らを
慰めて、叱つて、励まして
どうにか飼い慣らしている
その間だけは
羊ではなく羊飼いでいられるのだから

セブンスコード 平井達也

教本どおりの調弦なら
オープンAm7
だから3弦を半音上げて順番に
GC#EAでオープンA7

ウクレレならばベグをひねるだけ
さてきみ自身についてならば
どこをひねって何の張り具合を
半音分縮めたものだろうか

ちよつと濁つていて
繊細さには欠けていて
でも聞き直つた図太さがある
そんなコードもないと思が詰まる
オープンA7のウクレレに
ポトルネックが一本あれば
ブルースを鳴らせる
いつまでもかき鳴らしていられる
お行儀のいい調弦でなくていい
半音上げてみるといい
磨いた靴は似合わないけれど
味のあるブルースを歌えるようになる

果てしなき抒情 米山浩平

詩作者の書いた
(不可視)を越えて
(無数)から
ひとつを救い出さなければならぬ

ただ 風が吹いているだけ
ただ 川が流れているだけ
ただ そここして(無数)が仕掛けられている
抒情詩に延命をほどこす
狡猾な(無数)はどこに潜伏しているのか
いつまでも 開いたままの扉
どこまでも つづいている道
限りなく引きのばされた時空間に宿る
もしくは
いつでもない始原
どこでもない終点
どうでもない、どこでもない何処かへひそむ
むしつてもない、どこでもない終点
何も描かれなかった地図
さまざまな詩句を量産する「不可視」
とありあえずの余白と不在と沈黙と幻影
つまりあえずのゼロが(無数)を隠す
形式的束縛からの逃走 外界喪失
詩作者が思う夢の構図に置かれてしまえば
語り手を含めた人物はさらに輪郭を奪われる
もしくは
「そこには誰もいなかった」
愉快な眺めだ

不動のカートン越しに陽がもれる
術後の患者たちは
無限大の抒情につぶされた知覚をとりもどす
夢の中で夢を見ている夢多き詩作者は消滅した
詩人ではないふりをしている生活者もまた
ついでに一掃された
詩作を捨てた患者たちの証言により
たしかな像を結ぶ壁と床の
おびただし数の傷はかぞえられる
ドアノブが(いつまでも)
そこに在る

(とある美術館の、人工皮革の黒いソファーたち……)

たなかあきみつ

とある美術館の、人工皮革の黒いソファーたち、館内のソファーはその時々ままぜんぶ空席で若干の体軀の窪みのあるソファーもあれば(時間のロブ)上のアイマスクの定位置から、欠伸のようにずれたソファーもある。壁の展示面はそつちのけいつまでもそこに座つていたが幼子、その作品は題してやぶ眺みの(薔薇の花売り)で、ヴァイクトル・ルイサコフが一九九三年に描いた油彩だ、画面の左側、描かれた人物の心臓の位置に対向してburlesqueの例の三本の薔薇の花、画面の顔色とおなじく薄いローズピンクだ。その左右の眼高には充血してそれぞれ赤と黒の月と太陽が灯る。ところで晩秋の花屋の一角には赤錆だらけのポインセチアの勇姿。この人工的すぎる発色はオリーブの葉の硬調に比して眼に痛い。申し遅れましたがこの(薔薇の花売り)だけが壁に架けてある。館内の美術館の一室で幼子は性分としてその展示室のばかりかどのソファーにもむすがるでもなくやたら座りたがる、その子とを連れきた若い母親にはここで滞留時間は猫の目の血眼のショッピングの四倍以上に感じられよう、美術館どころか改装後のデパートでもスーパードでも新参のイケアでも。当の幼子のソファへの偏愛は相変わらず矩形の滞空時間に納まるどころか新たに銀のwheechairを見つけてやるとも上機嫌だ。(たとえば金銀のロンジンを細胞にはめくられて久しい、グッシン類顔貌の老嬢は食事のたびに牡蠣のメニューを所望する。無時間の食へ過ぎにもとさら発疹にも留意するどころか、ミルクの海原をフォークでもつと牡蠣をと突きまくる)

《薔薇の花売り》の画面の色はやらのつべらぼうの薄皮を、顔色と薔薇の花色を除いてますます濃緑化の一途をたどる、翻つてsevere green deepやunpulsed greenを含め左側の小卓も薔薇の茎もキリコ画に遡る人物の鱗む右足、五指とも指折り帯電する左足。とはいえどの場面の下線りにも窺える深緑の(多指症)にキリコの、路上の乾燥した流体力学の数式の鏝をかける。何重もの集束イエロウのトレース地平線の裾はレンガ色をおびて色彩の機影はおオイナユヴェー! 地平線の未完のトラヴァース!

本日の課題は緑直系のレモン髪につきカンヴァスにぎとぎと融けだす前に尖筆で削れ削れあるいは鉄線の替え刃のカン進行形、内海の片手では絞りにきれいなレモンの色彩的難題よレモン産毛のひよこ化を阻止せよ。これはブルーをくゆるせる(serene)蝸牛ではない、灰色にレーキが身軀にもアープにもわんざか顔見せ、ほらこが思案のしどころだ、傲然とBismuth的に蝶にも蝶にもなれずDQのドレ画の風車よ、投げやりにも回転不足にも到底なじめず



étude 四肆舞 01/02 池田 康

1 ハムレットの亡霊をさがす都市
絶望の豪雨に濡れる街路樹
人類の記憶に濡れる小鳥たちの
さえずりは礎となって敷石道を打つ

心は頭ななバター
ナイフも入らない冷たさ
城の石垣の石の硬さ
フライパンの上で柔軟になる
心は従順なバター
たちまちに溶けて形を崩し
流れ落ちてどこかへ消え
石の板の中で固まる

2 ハムレットの亡霊が見つめる都市
朝を迎えても夜の暗さをひきずり
夜を迎えても安らかな眠りは訪れず
movementは十字路をまわしつづける

戒厳令下の都市では毎朝厳重にポケット検査が行われる
ポケットに危険思想をひそませているというのだ
ポケットに入る程度の危険思想は大したことないのだが
官憲にお勤めの検査官は真剣そのものである

しかし敏腕な検査官も見逃すものがある
十円玉とかハンカチとかはずれ馬券とか
十円玉とか自転車鍵とかコンビニのシートとか
十円玉とかちびた鉛筆とかコンドームとか……
十円玉も十枚たまたれば缶ジュースが買える
百枚たまたればナイフが買える
千枚たまたればダイナマイトが買える
数万枚たまたばナイフが買える

ポケットの底の十円玉は危険思想であるか
断言するが十円玉は無害無力である
十円玉は神様への賄賂にもならない
十円玉という小さな思想をだから良い子は待む